

西之島の火山活動解説資料（平成 26 年 9 月）

気象庁地震火山部
火山監視・情報センター

海上保安庁等の観測によると、噴火及び溶岩の流出が継続し、新たに形成された陸地の拡大が確認されています。

西之島では、今後も噴火が続くおそれがありますので、西之島の中心から概ね 6 km 以内の範囲では噴火に警戒してください。また、周辺海域では浮遊物に注意してください。

6 月 11 日に火口周辺警報（入山危険）及び火山現象に関する海上警報を切り替えました。その後、警報事項に変更はありません。

活動概況

< 9 月 17 日の状況（図 3～5）>

17 日に海上保安庁が実施した上空からの観測によると、8 月 26 日に確認された溶岩マウンドは、一部を残してその北側に形成された新たな火砕丘に埋没しているのが確認されました（図 3、4）。この新たな火砕丘の北側には、約 30m 間隔で並んだ 3 個の火口を持つ火口列が形成され、溶岩片を伴う噴煙を連続的に噴出していました。溶岩片は火口縁上約 100m の高さまで噴出し、噴煙高度は火口縁上約 1,400m で、東へ約 10km 流れていました。

この新たな火口列の最下部では溶岩流が北向きに流出し、その末端部は扇状に広がりほぼ西之島旧島を覆っているのが確認されました（図 3）。この溶岩流により、新たな陸地は 8 月 26 日の調査時と比較して北方向に約 500m 延伸しており、新たな陸地の大きさは、東西方向に約 1,570m、南北方向に約 1,440m、面積は約 1.49km²（前回 8 月 26 日：約 1.21 km²）でした。

変色水域は、島の北側、西側及び南側の 3 ヶ所に分布していました。北側では、褐色の変色水が北海岸から南東方向へ帯状に幅約 400m、長さ約 500m の範囲に分布していました（図 5）。西側では、褐色の変色水が西岸一帯に幅約 100～200m の範囲で分布していました（図 5）。南側では、薄い緑色の変色水が南海岸線付近に幅約 50～100m で分布していました（図 5）。

上記の他に海上自衛隊等の観測により、噴火及び溶岩流の流出が継続し、新たに形成された陸地の拡大が確認されています。

）火口内に湧き出した溶岩が丘状に高まりを作ったもの。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページ（<http://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/volcano.htm>）でも閲覧することができます。次回の火山活動解説資料（平成 26 年 10 月分）は平成 26 年 11 月 11 日に発表する予定です。

この資料は気象庁のほか、国土地理院、海上保安庁及び海上自衛隊のデータを利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の『数値地図 25000（行政界・海岸線）』を使用しています（承認番号：平 23 情使、第 467 号）。



図1 伊豆・小笠原諸島の活火山分布及び西之島の位置図

西之島は、東京の南方約 1000km、父島から西に約 130km に位置します。

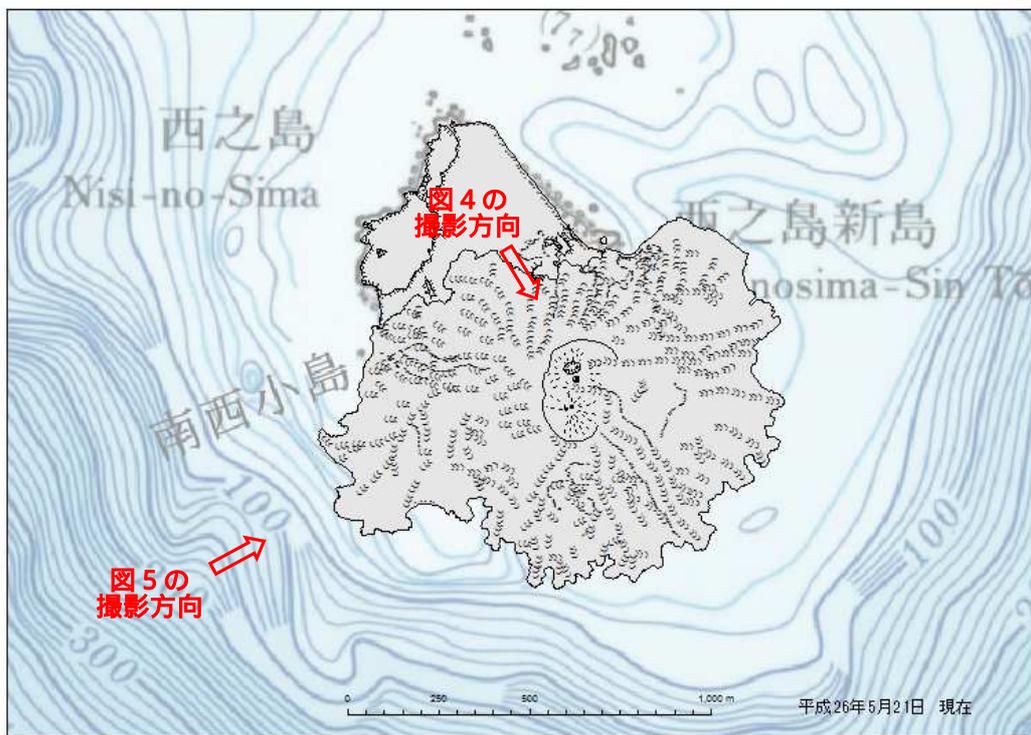


図2 西之島 主な撮影方向
西之島地形図（海上保安庁作成）に撮影方向を追記。

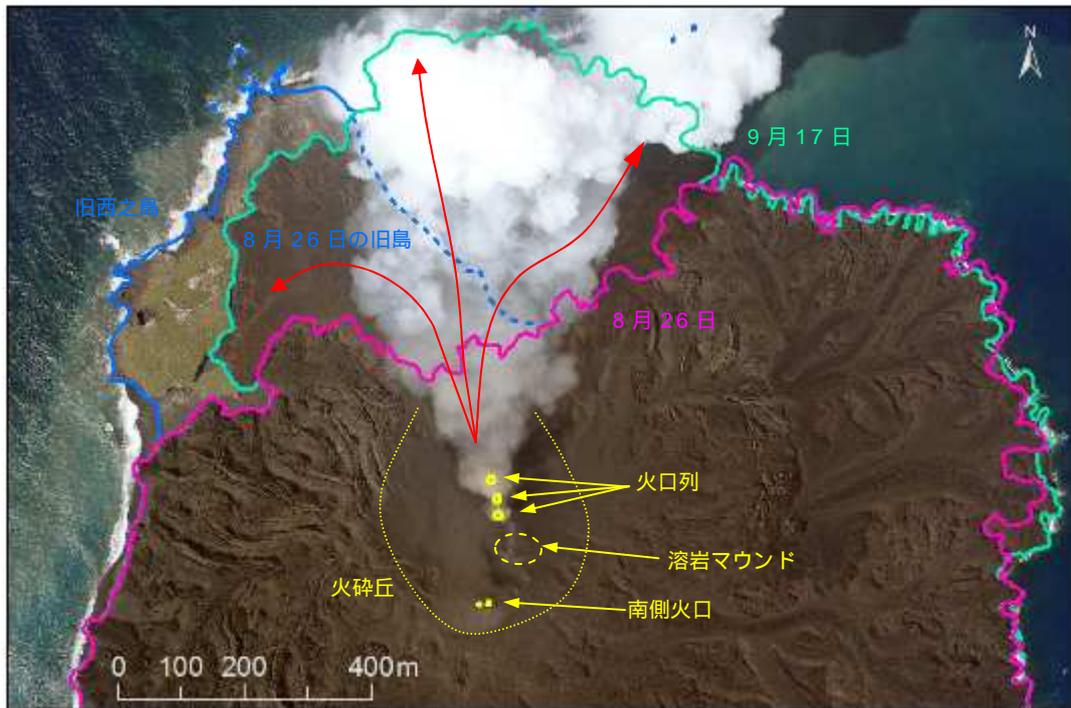


図3 西之島 活動状況
(9月17日 海上保安庁提供)

- ・溶岩マウンドの北側に新たな火砕丘が形成し、その北側には約30m間隔で並んだ3個の火口を持つ火口列が形成され、溶岩片を伴う噴煙を連続的に噴出していました。
- ・新たな火口列の最下部では溶岩流が北向きに流出し、その末端部は扇状に広がりほぼ西之島旧島を覆っているのが確認されました。



図4 西之島 火口列付近の状況
(9月17日 14時45分 北西方向から撮影・海上保安庁提供)

- ・新たな火砕丘の北側には、約30m間隔で並んだ3個の火口を持つ火口列が形成され、溶岩片を伴う噴煙を連続的に噴出していました。溶岩片は火口縁上約100mの高さまで噴出し、噴煙高度は火口縁上約1,400mで、東へ約10km流れていました。



図5 西之島 変色水域の状況

(9月17日14時31分 南西方向から撮影・海上保安庁提供)

- ・変色水域は、島の北側、西側及び南側の3ヶ所に分布していました。北側では、褐色の変色水が北海岸から南東方向へ帯状に幅約400m、長さ約500mの範囲に分布していました()。西側では、褐色の変色水が西岸一帯に幅約100~200mの範囲で分布していました()。南側では、薄い緑色の変色水が南海岸線付近に幅約50~100mで分布していました()。